

日本の「美しい介護」をアジアに!

インタビュー vol.12

有限会社ナンクルナイサアケアネット 代表取締役 乾 由香さん



乾 社長

このほど日中経済交流研究会の幹事となった乾さん。なぜ中国、そしてアジアに興味を持たれたのか、お伺いしました。

■介護にもインバウンド需要が

ある中国出身の社長の一言がきっかけでした。「中国社会の高齢化は『一人っ子政策』で大変なことに。できるものなら介護事業をしたい」それを聞いた乾さんは「私ならできるかも」と思い、すぐに上海、杭州、蘇州、大連に飛び、現地でのサービス展開を探りました。しかし現実には甘くありません。コンサル指導という道も考えましたが「まだブランディング不足」と自己評価しました。

そんな時、別の中国人経営者が一言。「障がいを持つ富裕層は日本に来るのに壁がある」なるほど、中国人観光客のインバウンド需要に自社の介護サービスをプラスできないだろうか。例えば介護タクシーはあっても本物のケアができるドライバーは少ない。「うちは経験を積んだスタッフばかり。ブランド化できる」と。語学堪能な学生とのコラボ、旅行会社とのマッチングを模索。障害を持つ富裕層をターゲットに「介護付きガイドサービス」という切り口にたどり着きました。「心にしみる幸せ旅の提供」がビジョンです。マーケットはタイと中国に定めて、まずはタイのモニターツアーから始める戦略を。「中国人の方が要求は高いはず。まずは親日のタイで実績をつくる」のが狙いです。

■介護は美しい

もともと3人の子どもの持つ専業主婦でした。パートでヘルパーの仕事をして介護は女性が活躍できる仕事と気づきます。資格を取ると給料がビックリするほど増え、仕事にのめり込みました。やがてご主人の応援を受けて起業しました。初めは馬鹿みたいにもうまかったです。でも調子に乗った3年目に、罰が当たりました。業績が急降下し、社員さんとの人間関係も悪化。そして入った同友会で経営者の心構えを知りました。すべては経営者である自分の責任と自覚します。

そんなころ、ある特別支援学校で重度の障がい者を知り、「介護をやってるくせに私は何も知らなかった。この子たちは卒業しても行くところがない。そこをやらなアカン」と衝撃を

受けました。軽度（障がい）のサービスは多いけれど、重度の施設は限られている。「そこにこそ介護職を選んだことの誇りがある」と思い、大借金をして作ったのがナンクルナイサアケアネットでした。「重度の人の介護って本当に大変なんです。例えば食事介助でゼリーを食べさせる。それだけでも一人は首を持って、もう一人は匙（さじ）。二人がかりで30分から1時間も掛かる。汗だくになって顔がキラキラ輝いている。その人を受け入れられる施設は本当に少ない。私たちってめちゃめちゃいい仕事してる。介護って尊いし、美しい」と。

■知ってしまった者の責任

「どこまでも日本的できれいな言葉で、受ける側が『美しい介護をされているな』と感じてもらえる仕事を追求したい」と思う一方で、経営者としての冷静な目も併せ持ちます。重度の介護は誰でもできる仕事ではないからこそ利益率も高い。「もっともっとお給料のベースを上げたい」と。社員の待遇が向上すれば人材の確保にもつながる。「絶対に憧れの介護事業所にする」と。だから「日本だけを見てへんで、世界に行くで!と本気で思っている」とのお話です。

重度障害者の現実に出会った日を振り返ります。「知ってしまった者の責任感であり使命感。心動かされる感動を最大限にいかせる立場にあることを経営者はわかまえるべき」と思いは熱い乾さんです。

「ボランティアではなく経営者としてやる方が分母が大きくレバレッジが利く。介護を通じて人を幸せにしたい」乾さんの熱意がいつまでも胸に残りました。



取材：インタビュー 日中経済交流研究会：広報委員会
まとめ：坂元正三（坂元鋼材株式会社）